



意訳 北見国エサシの大金塊



へるふね Perupnei



目次

北見国エサシの大金塊

明治34年2月15日 地質学雑誌1902. 13巻2号 理学博士 神保小虎

北見国枝幸の砂金に関しては、明治32年10月白仁武氏の記事（日本のクロンダイク）が雑誌太陽に掲載され、札幌鉱山監督署山口監督官補の巡見報文が北海道の新聞に掲載された。また、石川貞二氏の砂金地案内図等の出版があって、枝幸と聞けば一攫千金と皆が思う様になった。

私は明治33年9月、北海道庁の委託によって枝幸に赴き、砂金買い入れ業者北島某及び料理店主堀川某の所有する、最大70匁（262g）を始めとする種々の金塊を見たが、誰もがこれを見れば一種の感動を覚えるだろう。

しかし、これらの金塊は最大のものではなく、先に地質学雑誌（明治33年1月分）に掲載された金塊は実に197匁（738g）で、これを得た人の喜びは察するに余りある。しかし、これでもなお枝幸最大のものではない。

今までで知られた最大のは、明治33年10月に採掘された205匁（768g）、長さ106mm、幅63mm、厚さ25mmで、全体が薄型で外側に石英が少々あるが、不純物は極めて少なく、1匁（3.75g）4円20銭以上は確かである。

この金塊は、ウソタンナイ川支流エトルシュオマプのウソタンナイ川との合流点から2町程上った所で発見された。ここは、広谷採金組合の区域に属するので、この金塊は当然広谷のものと思うかもしれないが、枝幸において採金組合というのは、自ら採金する組合ではなく、採金しようと思う人に鑑札を売って、その区域内で採集させる組合であり、採れた砂金は採金者のものとなる。

この金塊は広谷に鑑札料12円を払って砂金を採っていた中村、大宮、中川、本田の4人組により発見されたが、広谷は、自分の区域から出た記念として、9百数十円を支払って引き取ったという。

この金塊が出た場所は、手つかずの場所ではなく、今まで何度か掘り返した所で、金塊が泥土にまみれていたため、到底金ではないと思い放棄されていたのだろう。また、これを産出したエトルシュオマプは、元来ナイ川（金が無い川）と言われていたが、次第に砂金に富む事を知られ、ついにウソタンナイの一大鉱区となり、この2百匁の金塊で益々その名を高めたのである。

金塊の表面はでこぼこしており、所々やや深い窪みがあるが結晶は見られない。また、他の表面は平らで、輪郭に丸みがあるのは川の砂利と衝突した跡である。

枝幸ではこの外、皇太子殿下に献上した75匁（281g）、地質学雑誌に掲載した197匁（738g）、私が見た70匁（262g）、東京工科大学で買入れた56匁（210g）等々の金塊が出たが、聞くところによれば10匁（37.5g）位の小塊は珍しくないという。このため、枝幸の金源は山中の岩石にあるとし、枝幸の三大砂金地であるウソタンナイ、ペイチャン、パンケナイの水源であるポロヌプリ山に目を付ける人は少なくないが、枝幸砂金地で金粒の見える石英脈は、ペイチャン小川の下流にあるのみで、その他については確たる証拠が無い。

枝幸地方では、鉱区占領目的の出願が多いが、十分な鉱脈探検を聞いたことがない。福地氏等の調査及び私の巡見で考えると、枝幸の砂金は元来古生層の中における石英脈か

ら出たものであり、古生層の砂利を有する川では常に砂金が発見される。しかし、砂金に有望な箇所が多いのに、鉱脈の発見が少ないのはおかしく、枝幸でも砂金を採り尽くした後に石英脈を採掘し、有望な金鉱脈が発見されるのではないか。

これは外国における砂金地の通例で、始めは川床の掘りやすい砂金を掘り、次に川岸のやや面倒な砂金を掘り、最後に固い岩を掘って金鉱業を起こすからである。

意識 北見国エサシの大金塊

著 へるふね

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
